

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 427

## 一人でも拒否する勇気 - 『イスラエル 兵役拒否者からの手紙』

オムレイ・ヤシュラム《ハイファ近郊のキブツ（農業共同体）のメンバー。機甲隊中尉。イエシュ・グブウルの拒否声明とともに、『勇気ある拒否』の声明に署名。》

「壊れた夢」(2002年)

私は25年間、夢の中で過ごしてきた。素晴らしい夢だった。そこでの私は外敵からイスラエル国家を守る勇敢な兵士だった。夢の中では何もかもが明快だった。向こう側にいる奴らが悪玉で、私たちは善玉だった。私は何の疑問ももたずに任務を果たした。夢の中で生きるのは本当にすばらしかった。私は名誉と尊敬を得ることができた - そして将校に昇進もした。

しかしその後、私は占領地での任務に配属された。夢が少し覚めてきた。飢えた家族のために食料を手に入れようとして「境界」をすり抜けて行くパレスチナの労働者たちを追いかけねばならない。しかし、私は彼らをつかまえた - 夢の中では、力を尽くして任務を遂行するよう要求されていたからだ。私は真夜中にパレスチナ人の家に入り(彼らの夢は全く違っていただけだろう.....)、小さな子どもを引きずり出して尋問するため秘密警察の施設へ引き立てた。彼らがどんな夢を見ているかは知りたくなかった。そして私の夢はずるずると長引いていった。私は兵役を終えてもまだ夢の中に生きていた。

ある晩、夢を見た。私が真夜中に両親のいる夢から引きずり出した子どもの夢だ。彼はおもらしをし、ファラの刑務所に行くまでのあいだ、ずっと泣いていた。朝になって、あの子は今どうしているだろうと思った。心の奥で答えは出ていた。とっくに気づいていなければならない答えだった。あの子は国防軍のバリケードに向かって銃を撃っているだろう。自爆したかもしれない。私は手を貸してしまったのだろうか？ 私は突然、何年も続いた夢から覚めた。

中東の最強国は、投石する子どもの一団に国を破壊されるのを恐れている。恐れがあまりに強すぎて、私たちはもはや自分の姿を鏡に映してみることもできない。私たちの体制は、人類の歴史上最も野蛮だったころの体制を思わせるようになった。罪もない人々の家を襲うために国家が兵士を送り込んで流血の惨事を招き、その一方で国家の顔に唾する入植者たちに細やかな配慮を見せている。国家の名において、殺し殺されるための

兵士を送り込み、殺し合いを続けさせている。

私はこんな犯罪にはこれ以上加担しない。自分が住んでいる国を破壊する行為には手を貸さない。占領はもうたくさんだ！

「はい」と言うか、「いいえ」と言うかで人間は大きく分けられる。「いいえ」と言う者は幸いだ。彼らは天国をもたらすであろう。天国は軍務に対して「いいえ」と言う者たちに、あるいは、「いいえ」と口に出し、そして「はい」と言える別のものを創り出そうとしている者たちに属しているのだ。

**デビット・ハハム=ハーソン**《2001年に徴兵を拒否して、投獄》。

両親への手紙 - 第4軍事刑務所にて(2001年8月)

私は、この「第4軍事刑務所」の中で、新聞に載ったおそろしい記事を読んでいます。画像にも音声にも接することができません。ここからは鉄条網のフェンスしか見えません。しかし、外からの苦しみは刑務所の奥まで届きます。報復には報復を返し、殺害には殺害を返す。なぜですか？ なぜ、ユダヤ人の人々はこれほどの苦悩を作り出すのでしょうか。どうして、私たちは自分にも相手にもこれほどの嘆きをもたらすのでしょうか。イスラエルの誇りはどこから生まれるのですか。なにゆえに、この国の人々は殺人行為を重んじるのですか。

私はイスラエル軍の兵士です。抑圧的な作戦への参加を拒否して投獄されました。いやしくもユダヤ人でありながら、自らも難民の息子でありながら、なおかつ難民を抑圧しているという自覚がそうさせたのです(イスラエルでは、パレスチナ人に対する抑圧があることでは意見が一致しています。それが正当化できるか否かという点で異論があるにすぎません)。私は神を畏れるユダヤ人です。したがって、自由を奪う行為に加担することも、占領地区で軍務に服することも許されません。私は投獄されていますが、私が知っているイスラエル人のほとんどよりも、自由を感じています。理由はただ一つです。私には復讐という重荷がなく、復讐にとまなう道に外れた満足感もありません。無神経や無感動とも縁がありません。私は、自分とは違って、ふつうに生活する権利をもてない人々のことを心配しています。そういった人々は、食べるものと着るものがある、楽しみがあって、健康に恵まれて、成功を夢見ることができて、自分の車を持てる、そんな生活を送ることができません。私は、侮辱されながら毎日を生きている人々のことを心配しています。彼らは働く権利を奪われて、自分の町や村に閉じ込められています。私は、家をつぶされ、果樹園を破壊された人々のことを心配しています。

私は心配しています。自分に向けられた恐るべき敵意には、正当な理由があることを知っているからです。この敵意は恐怖を生み、若者の自爆攻撃といった誤った形で表現

されます。しかし、この極悪非道な行為が生まれる条件を用意したのは私たちです。私は心配しています。あの歓喜の叫びを知っているからです。ユダヤ人からもアラブ人からも数え切れない犠牲者が出ましたが、彼らを悼む声は報復の歓喜の叫びによってかき消されるのです。夫に先立たれた妻、父を失った子ども、体に障害を負った人がどれほどいることか。彼らは、残された人生を苦しみながら生きることになるのです。私たちの意地と無神経のせいです。

大多数のイスラエル人はこのような心配をしていません。こういった心配は軌道修正を要求するからです。一方、多くの人々の「心配」はさらなる破壊を求めるだけです。私は囚人ですが自由です。それでも深い痛みを感じています。私や仲間が投獄されることによって、多くの人がかっと考えるようになってほしいのです。パレスチナについて、そしてさらには彼ら自身、つまりイスラエルのことをもっと考えるようになってほしいのです。私はこの投獄によって、イスラエルの社会に正しい形がかかわっているのだと思っています。私は、投獄されることで、社会に対する責任を逃れられるとは思いません。軍務には服さなかったとしても、軍隊の行動に対する責任はあると思います。私は犠牲者ではありません。事実はその逆です。自分にも責任の一端があると信じているからこそ、抑圧への参加を拒否するのです。

私は一兵士として祖国に仕えたいのです。私はイスラエル社会の一員です。そこには私の愛する人たちが暮らしています。私とは意見の異なる人たちもいます。右派もいれば左派もいます。イスラエル人は強くあってほしい、勝利を手にしてほしい。そしてなおかつ、抑圧している人々を正視して彼らを理解しようとしてほしいのです。力づくの勝利は勝利ではありません。集団と集団、個人と個人が平等に相對することに同意しない限り、私たちの恐怖は消えないのです。抑圧政策をとり、基本的権利を無視している限り、私たちは恐怖をいだいて暮らし続けるのです。

私たちが相手にもたらした苦しみ、そして自分自身にもたらした苦しみを正当化してはいけません。私たちは自力で軌道を修正して問題を解決しなくてはなりません。軌道の修正は戦車をしのぐ武器となります。私は、今回の投獄は軌道修正に向けた地ならしだと思っています。みなさんも私の投獄について考えてください。そして私たちの本当の姿を見てください。そうすれば何かが変わっていきます。 第4軍事刑務所にて

ペレツ・キドロソ 《1938年、ウィーン生まれ。ナチス進駐後イギリスへ逃れる。1951年、イスラエルに移住。作家・翻訳者・ジャーナリスト。本書の編著者》  
「シナイ半島のアーモンド」

私たちは斜面を登りきって一息ついた。シナイの砂に足をとられながら歩くのは大変だった。足早に歩を進めるベドウィンのガイドに先導され、若さの盛りをとくにすぎた肥満気味の予備役兵たちは、ライフル銃と装備一式の重みによたりながら、途方もない暑さにあえいでいた。顔の汗をぬぐっていると鈍い機械音が聞こえたので、そちらに目を向けた。そこでは荒っぽい作業が進行中だった。幾重にも連なる砂丘の向こうで、一台のブルドーザーが動いている。巨大なブレードが砂まじりの土地に押し込まれるたびに、エンジンが悲痛な音を立てていた。見るうちに、運転手がブルドーザーを前進させて一本の木に突き進み、ひっつかんだかと思うと根が抜ける前に地面にねじ伏せてしまった。ブルドーザーの後ろには、化け物じみた機械によって引き裂かれた木が列をなして横たわっている。残された木々にも同じ運命が待っていた。一列に並べられたアーモンドの木。

あ然とするような光景だった。当時のイスラエルは「砂漠を征服して沃野よくやに変える」ことで世界的な名声を得ていたというのに。私の目前では、よってたかって豊かな果樹園を何も無い砂漠に戻している。人間の意志が人間の努力をぶち壊していく。つらい光景だった。「何をしているんだ？」私はガイドに尋ねた。ガイドは突き放すようにブルドーザーを見やった。「新しく入ってくるユダヤ人入植者のために土地をきれいにしているのさ」。ぶっきらぼうな口ぶりだった。他に話すことはなかった。

1974年のことだった。イスラエルがシナイ半島を占領して7年が経過していた。当時の政府は、半島内の戦略的拠点にイスラエルからの入植者を送りこんでアラブ地域を解体し、支配体制を固めようとしていた。植民政策のことはメディアを通して知っていたし、当時はそれほど大規模になっていなかった占領に抗議する運動にも参加して、効果のほどはともかく精力的な活動を行ってもいた。だが、人づてに聞いたことと、自分の目で見たことの違いには雲泥の差がある。私が見たのはつらく、打ち消しようなない事実だった。

その晩、テントに戻ると、誰かがトランジスタ・ラジオをつけてニュースを聞き始めた。主要ニュースが終わると、それほど重要ではない話題に切り替わった。

「シナイ半島のイスラエル軍当局は、ここ数か月内に国有地を不法占拠したベドウィンの無断居住者に対して行動を起こしました。無断居住者側は、アーモンドの苗木を植えて土地所有の証あかしとし、権利を主張していました。これらの苗木は引き抜かれました」

私はこの恥知らずなごまかしに衝撃を受けた。本当に顔をぶたれたぐらいの衝撃だった。キブツで過ごした何年ものあいだ、私は果樹の世話に明け暮れていたから、木について一通りの知識はあった。ブルドーザーで引き抜かねばならないほどの木が、植えられたばかりの苗木でなどあるものか。あの木々は見事に育ち、地中深く根をはっていた。環境に恵まれぬ砂漠の地であれほど大きくなるまでには、長年にわたるこまやかな世話を受けてきたはずだ。最低でも数十年はかかったにちがいない。この地に長く暮らして

きたベドウィンの一族が、新参の「無断居住者」などどうして言えるのだろう。私たちの政府は過誤と不正を重ねるだけではならず、真っ赤な嘘をついて占領地区での悪行をごまかしていた。

毎年の子備役はずっと私の良心を苦しめてきた。指定された部隊に出向くたびに、占領地区のどこかに配属されるのではないかと思って気が気ではなかった。私は絶対平和主義者ではない。義務兵役も務め上げたし、キブツではふだんから武装して警護の任にあっていた。外部からの攻撃にさいしては、いつでも祖国を防衛する心構えができていた。だが、占領したアラブ人の土地の治安管理が、「祖国防衛」だとは思えなかった。いやいやながらではあるが自分が遂行することになる軍務は、イスラエルが他の民族と彼らの土地を支配し続けることにささやかながらも貢献していることに気づいていたのだ。そう、私だけではなかった。何千人もの兵士、徴集兵や予備役兵が今日も明日も同じような任務を遂行していた。私たちの軍隊は「国防軍」だったが、またたくまに「占領軍」になっていった。

認めたくはないが、自分もその一部だった。腹立たしい事実だった。自分の心の核ともいえる信念に真っ向から対立し、占領反対の立場とも相容れない。おかしなことになってしまった。私は一年の11か月を占領に反対して過ごし、残りの一月は占領続行に手を貸している。だが、自分に何ができるだろう？ 命令に従わないというのはどうだろう？

不服従という考えは、私にとって目新しいものではなかった。何人かの友人や同僚は、占領地区での軍務を拒否して投獄を宣告され、社会的にも非難の的になっていた。予備兵役は法的義務であると同時に、社会が要求するノルマでもあった。この当時、軍隊は神聖不可侵なものと考えられており、兵役を回避するケースはほとんどなかった。仮病を使って兵役を逃れようとすれば世間の鼻つまみになった。政治的動機に基づく良心的兵役拒否は、当時の状態では、<sup>ぼうとく</sup>冒涇罪であり、不忠であり、背信行為だった。

自分について考えてみると、拒否という抗議活動にともなう社会からの風当たりには対処できるだろう。周囲も私と同じ意見だった。私は兵役拒否への賛意を公言していたが、ティーンエイジャーになった二人の子どものもとも考えなくてはならなかった。二人ともガザとの境界近くのキブツで成長し、軍隊を尊重する思想を身につけていた。私が国の安全を守る義務を回避すれば、子どもたちを針のむしろに座らせることになるだろう。父親としてこんなことが許されるのだろうか？

二名の親友が占領地区での兵役を公然と拒否してからというもの、この問題は私の心を離れなかった。私にできることといっても、テルアビブ大学にある物言わぬ壁の下の方に、友人の釈放を求めるスローガンを書きつけるぐらいだった。敢然とした行動に出た友人のことを思うと、同じことのできない自分が恥ずかしかった。だが、結果を思うと一步を踏み出すのは難しかった。私は決心を先送りし、信念と不安の狭間で悩んでいた。

揺れ動く心情を抱いたままでふたたび軍務に復帰すると、今回の配属先はシナイだった。前回までと同様、私はいよいよ配属先に向かった。見張りの任務の後で、テントを共にしていた右派の人々と、政治議論にふけるのがストレス解消になった。この議論は時間つぶしにはなかったが、さまよえる私の魂に道を示してくれたわけではなかった。

最終的に道を示してくれたのは、引き裂かれたアーモンドの木だった。そして、ラジオのアナウンサーが艶のある声で読み上げた嘘のニュースだった。この二つが心の拮抗を崩すことになった。私は覚悟を決めた。奇妙な決心だった。自分は何よりも先にヒューマニストであり、同胞たる人間を大切にしていると思っていた。だが自分を行動に駆り立てたのは、生身の人間に対する虐待行為ではなかった。私の怒りに火をつけたのは、一本の果樹に対する暴虐だった（やがて、自分と同じような人が大勢いることがわかってきた。兵役拒否者らが話してくれたところによると、彼らもまたごくささいな出来事がきっかけとなって軍務を拒否するようになったらしい）。

養は投げられた。ふたたび予備役の召集がかかると、私は前もって所属部隊に手紙を書き、「良心および信念上の理由から、占領地区における軍務を拒否」すると宣言した。返事はなかったが、私は部隊に出向くとすぐに上官に向かって「軍服を着てグリーンラインを越えること」は拒否すると告げた。驚いたことに（というよりは、失望したことに）予測していたような重大な結果にはならなかった。上官は驚いた表情を見せ、脅し文句を言って服従させようとしたが、本気になって対応しているわけではなかった。結局、私は67年以前のイスラエル領内での任務を割り当てられた。召集されたときにはいつもこれと同じパターンだった。私の反抗に対しては、罰則や軍法会議を持ち出してなだめたり脅したりが続いたが、口先だけで終わってしまった。不思議な展開だった。部隊の将校は一人残らず極右主義者だった。おそらくはそのために、彼らはしぶしぶ私の抗議を認めたのだろう。いずれにせよ、私はしつこく拒否をくり返したが一度も投獄はされなかった。

心配は克服できたが、現実には何も達成できなかった。何よりもまず、抗議しても誰も気がついてくれないということが不満だった。直接の知人と同じ部隊の予備役兵を別にすると、私の拒否のことを知る人はいなかった。組織的な拒否運動があったわけではないから、たとえ投獄されたにしても私の行動に注目する人はいなかっただろう。

こういった状況だったので、私の軍務拒否はドン・キホーテ的なひとりよがりの域を出なかった。だが、とりあえず私の良心には平和が訪れ、恥じることなく鏡を見ることができるようになった。やがて、私がやったような個々の行動が急進的な平和運動の思想的活性剤となっていった。私の個人的な決断から8年が経過したころ、若い予備役兵らが軍務拒否という旗印を掲げて服従には限度があることを宣言した。ヘブライ語では『イエシュ・グブウル（限界がある）！』。待っていた甲斐があった。もちろん、私も参加した。

以上の三通の文章（手紙や声明文）は、『イスラエル 兵役拒否者からの手紙』に掲載されている約40通の中から、ピックアップして抜粋したものである。それらの文章について、ここでは論評するつもりはない。彼らの「拒否」宣言がイスラエルという枠組みを越えて、どれほどの深度に達しながら、「パレスチナ」問題に無関係で無関心な我々の存在様式に訴えかけてくるものがあるのか、をじっと耳を澄まして聞き取ってほしい。彼らの「拒否」宣言に対しては私自身の「拒否」宣言を向かわせる中でしか発語しえない気がするが、ただ一つだけ、《私の怒りに火をつけたのは、一本の果樹に対する暴虐だった》（ベレッツ・キドロ）と書き刻まれている一行に、究極の無抵抗な生き物に対する人間の底なしの「暴虐」を覗き込まなくてはならないと戦慄する。この《一本の果樹に対する暴虐》から「沈黙する悲鳴」が限りなく感じ取れるが、私の視線はすでに次の「拒否」宣言に向かっている。

**ドロム・ヴェルナー** 《イエシュ・グブウルの創立メンバー。テルアビブ支部での活動に従事。父メイアは長年イスラエル共産党の指導者を務め、1948年のイスラエル独立宣言の署名者中で最後の生存者。現在、ソーシャルワーカー。》

「沈黙する悲鳴」

この牢獄で何をしているのかと訊ねてくる人々には、「私は拒否者です」と答えている。以前からの受刑者らはそれほど驚かない。第6軍事刑務所では、拒否者は珍しい存在ではないからだ。彼らはすぐに、ここに収監されていた他の拒否者の名を列挙する。ここの受刑者には「帰還者」もいる。定期的な兵役義務について所属部隊に戻るが、無許可離隊者として再びここに戻ってくる兵士たちだ。生身の拒否者に初めて会った別の受刑者らは、私のような「年配者」が、占領地区での軍務をめぐって軍隊と対立した理由を知りたがる。言うまでもないが、占領地区を「彼ら」（アラブ人）に返すかどうかという兵士個人の政治的意見と、軍務に服したくない、もしくは自宅から市営バスで行けるよりも遠いところに配属されたくはないという気持ちのあいだには何の関係もない。

受刑者の多くは実戦部隊に配属されている。刑務所とはもっと簡単な軍務についたり、早めの除隊になって家に戻るための通過点だと考える者もいる。拘留されているのに、自分の所属部隊を誇りにしている者もいる。このような人々の怒りと不満は、全体としての軍隊組織ではなくて拘留処分の原因となった特定の上官に向けられている。こういった兵士たちとの遭遇は何よりも大変だ。

対人関係はスムーズだ。受刑者どうしの仲間意識から、配給毛布のうちの二枚を裏返して「パレード」にする手伝いをしてくれる者もいる（「パレード」というのは、ひどくばかげた毛布のたたみ方を指す隠語だ。毛布を「パレード」にするのは、刑務所内の規律責任者にとっては良心にかかわる問題であり、新入りの受刑者にとっては時間にか

かわる問題だ。パレード状態の毛布は、16重にたたんであるかどうかの検査を受ける。受刑者仲間が私のそばにやって来て、刑務所の当局宛に要求の手紙だとか種々雑多な書類を書く手助けをしてくれる。それと同時に、占領地区をめぐる「返すべきか否か」問題だとか、PLOと「対話すべきか否か」問題についても意見をやりとりする。

意外なことにここでは、占領している側の人間にとっての占領の意味が見えてくる。表向きは、世界中のどこにでもいるようなふつ々の若者たちは、現在や未来のガールフレンドについてとか、釈放されるまでの日数について話している。だが、テントの中では、再三にわたってインティファダでの経験へと話題が戻っていく。パレスチナ人を見分けがつかないほどたたきのめしたこと、少年を追いかけて捕まえたこと、その母親が大声をあげながら走ってきて少年を取り戻そうとしたこと、「自由党」の党員が捕まえたアラブ人を国境警備隊に引き渡し、「自分の」アラブ人を殴らないでくれと頼んだこと、警備隊は彼が立ち去るのを待ってアラブ人を打ちのめしたことなどが話される。私がテントの中に入るたびに話は止むか、あるいはもっと一般的な話題に切り替わる。

この沈黙からは悲鳴が聞こえてくる。私はこういった沈黙の物語を何度も聞いてきた。別の土地（ドイツ）でも同じ経験をした。一つの世代全体が口を閉ざし、子どもたちに自分の過ごしてきた人生を語ろうとしなかった時代があった。そしてこの刑務所でも、私は日常から切り離された生活の中で、占領地区での日常業務に従事している人々と顔をあわせている。一つの世代全体にとって、体制側が認めた暴力は日常の一部なのだ。

自立たない場所で周囲にあまり人がいないときには、小さな声で話しかけられる。だれかがこっそりと側に来て、自分はそんなことはしなかった、自分は違っていたと告げるのだ。何と言おうが、彼らつまりアラブ人は人間なのだから、と。

イスラエルのユダヤ人が真正面から語ろうとしない過去があるのを感じる。というより、彼らがパレスチナ人を抑圧し迫害するとき、自分たちが50数年前にナチス・ドイツから抑圧されて迫害されてきたことと、どう重ね合わせてきているのかということだ。つまり、自分たちが殴打し殺害しているパレスチナ人の中に、ナチス・ドイツから殴打され殺害されてきた自分自身を見出すことはないのだろうか。かつて自分たちがされてきたことと同じことを、他の民族に行っているのではないか。彼らの《沈黙からは悲鳴が聞こえてくる》。この《沈黙の物語》を《別の土地（ドイツ）でも同じ経験をした。一つの世代全体が口を閉ざし、子どもたちに自分の過ごしてきた人生を語ろうとしなかった時代があった》と、いう。自分たちユダヤ人が大きくかかえこんできた「沈黙する悲鳴」に真正面から向き合った「拒否」宣言が、少数だが、以下にみられる。

アルノン・ローネン《この文章はアルノンの父であるアピフが、兵役拒否をした息子の記念として、世間の一般的な風潮に異議を唱え続けてきた家族の歴史を記したもの。

歴史家であるアピフは、ホロコーストを専門に研究している。》

「一人でもやる勇氣」(1989年1月30日)

以下の文書は、家族の年代史を短くまとめたものである。アルノン・ローネン曹長による占領地区での軍務拒否を記念して、この一文を彼に捧げる。

「スロバキア・ブラチスラバ 1942年4月」

一か月ほど前から、ユダヤ人を乗せた列車が東をめざして出発していく。列車の行き先は誰にもわからない。移送者らの運命も誰にもわからない。それでもユダヤ人たちは追放に先立って命じられたとおり、次々と出頭してくる。ユダヤ人はずっと昔から法律には従ってきた。今回も法律には従うだろう。

急進的な青年団体の指導者だった若い男が、命令には従わないよう仲間呼びかけることを心に決めた。この青年にも、列車の行き先はわからない。青年は山と積まれた未確認情報をもとに仲間たちに手紙を書き、東方への移送には裏がありそうだから行くのはやめるようにと呼びかけた。青年が彼らに勧めるのは、身を隠すか、比較的安全なハンガリーに逃れることだった。

やがて青年は同志と共に秘密のネットワークを組織した。組織の規模は小さかったが、ハンガリーへの亡命希望者を効率よく目的地に送り届けた。

年配の仲間たちは当局に従順だった。青年が進めている行為はいかがわしく、非合法の疑いありと話題にもなった。

ユダヤ人たちは驚いた。この青年は教育もあり家柄も立派なのに、法に従うことを肯んぜず、あやしげな連中の手を借りて未成年を密出国させている。いったい全体どうしてこんなことをするのだろうか？ 彼は刑務所行きになるだろう。まったくそのとおりになった。青年は法と価値観と規範を破り続けた。彼は密かに国境を越え、文書を偽造し、賄賂を払い、自分で自分を救うようにユダヤ人に呼びかけることをやめなかった。彼は刑務所行きになった。それも一度だけではなかった。

「ポーランド・ベンディン 1943年8月8日」

ベンディン・ゲッターはポーランドで最後まで残ったゲッター（注：ユダヤ人の強制居住区域）の一つだった。そこでは大がかりな掃討作戦が展開されていた。先週は二万人のユダヤ人が近くにあるアウシュビッツ絶滅収容所に送られた。作戦はまだ完了しておらず、集合場所には数百人のユダヤ人が残っている。ほとんどの人はすぐにもアウシュビッツに送られるだろう。残りの者はとりあえずここに留められている。街路には何百もの遺体が転がっていた。無人となった家屋の中に放置されていたユダヤ人の財産は、一か所に集められてドイツに送られるはずだ。

他のユダヤ人が近づこうとしない一画に、10人ほどの若者がしゃがみこんでいた。

ずたずたになった衣服をまとい、陰鬱な表情をしている。ベンディンに最後まで残っていたユダヤ人たちは、若者たちがシオニスト青年運動の指導者であることを知っていた。彼らは高い教育を受けて人望も高く、これまでの戦争中は精力的に教育や文化にかかわってきた。だが、彼らが夢中になって取り組んできたのは歌やダンスではなく、いかがわしくて危険な地下活動だった。

一団の中には二人の若い女性がいた。体や顔や服の状態からは、殴られた跡がうかがえる。ゲシュタポの尋問を受けたようだ。

二人とも無表情だった。一人は死を覚悟していたが、急に顔を上げると昂然として誓いの言葉を口にした。「私はいや。私はアウシュビッツへは行かない。列車から飛び降りるわ。殺されることになっても構わない」

「ゴラン高原・カラーア 1967年6月10日(6月戦争)」

進行方向を誤ったせいで、アルバート旅団の先頭大隊がシリアリーブ村近郊で予期せぬ戦闘に巻きこまれた。大隊長は負傷して後方移送され、旅団は前進できなくなった。旅団長はつらい決断を下して、前衛部隊を孤立無援で戦場に残すことにした。一方で自らは残りの部隊を率いて北東方向に進路を取り、当初の目的地を目指した。つまりは、先頭大隊抜きで旅団の使命を遂行するということだった。

戦車の砲塔に一人の青年将校が座っていた。彼は、スロバキアから来た青年とベンディンから来た娘の息子だった。大隊の指揮をとることになったこの青年は、前進を続けて東方のカラーアをめざした。青年が直面したのは、家族が経験してきたのと同じような状況だった。ただし彼は一般兵士ではなく、数少ない指揮官の一人だった。残された10台の戦車はその場にとどまることなく苦しい戦いを続けていった。前進を続けよと命令されていたわけではない。だが彼らは、旅団長に言われたとおりにするのではなく、共同の責任において命令からそれる行動をとった。数的優位に頼ることを拒否し、戦術が定める基本ルールには従わなかった。自己保身の本能に従うことを拒否し、自分のことだけを考えるようなことはしなかった。

イスラエルの戦車隊は、カラーア近郊に集結していたシリア軍戦車隊とその対戦車砲の射程距離内に入っていった。イスラエルの戦車は次々と被弾し、青年将校の親友が搭乗していた戦車にも爆弾が命中した。青年将校は戦車を止めて地面に降り、友人を助けて避難しようとした。シリア軍の砲弾が近くで炸裂して視界がさえぎられ、その体には散弾が降り注いだ。驚くようなことではない。決まりを顧みないものは痛い目にあう。

ユダヤ人たちは今回も驚いた。ただし今回は当惑したからではなく、賞賛の念に満たされたからだった。ユダヤ人たちは、この戦車隊が示した「一人でもやる勇氣」に驚き、彼らが戦争での定石と自己保身の本能に従わなかったことに驚いた。

「西岸地区 1989年1月16日」

パレスチナ人の蜂起が始まって一年が経っていた。女性が撃たれ、子どもが殺され、民家が爆破された。白昼の街路や夜間の自宅で何千もの人間が逮捕され、巨大な収容所に送られた。彼らはそこで尋問され、有罪を宣告され、追放された。撃ちながら泣く兵士もいれば泣かない兵士もいたが、全員が命令には従った。明らかに違法だと信じるだけの理由がある場合でもそうだった。命令は命令であり、蜂起は鎮圧しなければならず、町の治安は回復しなければならず、石を投げってくる相手は撃たねばならなかった。秩序を乱す者は投獄し、孤立させ、追放しなければならなかった。

今までの軍歴を通して実戦に参加してきた若い兵士がいた。二つの戦争を経験し、さらに新しい戦争に参加しようとしている。彼は命令に従わない決心をした。女性や子どもを撃てという命令は拒否することにした。

この行為のせいで彼は投獄されるだろう。ユダヤ人たちはまたしても驚いた。この若者はいったいどうしてしまったのか。三人の子どもの父であり、養うべき家族がありながら、何という過激なことをするのだろう。こんなことをすれば罰せられるというのに。

だがこの男は、家族の記憶を通して牢獄には親しんでいた。彼はスロバキアからの亡命を組織した男の息子であり、ポーランドのゲッターで戦った女の息子であり、ザウラから帰還した士官の弟だった。逆に言えば、彼が牢獄に同伴することになる家族の歴史は、「知らなかった」「どうしようもなかった」「こうするよりなかった」という言葉とは無縁だった。この家族は、従わぬこと、大勢が歩む楽な道は通らぬこと、ふさわしい罰を受けることを何度も経験してきた。それだけではなく、孤独な闘いの正当性が認められるようになるまでには、時間が必要なこともわきまえていた。この家族の父親は、息子の質問をはぐらかさなかった。「父さん、闇が地上を覆ったとき、父さんは何をしたの？」

**カルロス・レヴィノホフ** 《父カルロスは1946年、オランダで出生。ブーヘンバルト強制収容所のユダヤ人生存者のあいだでは、最初に生まれた子どもだった。1967年、イスラエル移住。ジャーナリスト。1989年、西岸地区での軍務を拒否して投獄。》

**アミット・レヴィノホフ** 《息子アミットは、高校生のとき、15の高校に所属する若者たちのグループを結成してスポークスマンとなり、国防相に宛てて、自分たちが招集された際はグリーンライン内の軍務に服する希望であることを伝えた。1988年8月に召集を受けたが、占領地区での軍務を拒否して、三年間の義務兵役期間中に4度投獄。》  
「父と息子 - 二人の兵役拒否者」(父)カルロスより。1989年)

インティファダが起こらなくとも、火山の噴火する日が来ることは、私にはわかっていた。もっとよく、もっと純粋に、もっと賢明になる必要はない。もっと気高くなる必要さえない。公正とバランス感覚と分別がありさえすればよい。それはどこにいるイスラエル人にもできることだ。

占領地区での軍務拒否について初めて軍隊に手紙を出したのは、1973年の6月だった。同年に起こった「ヨム・キップール(10月)戦争」(第4次中東戦争)が始まる数か月前のことだ。このときには投獄されなかったのだからあいだは規定どおりの予備兵役についていたが、やがてヨム・キップール戦争の衝撃に打ちのめされた。

悲しむべきことに、イスラエル政府は私の重荷を軽減しようとはせず、いわゆる「開明的な」占領を継続している。

拒否をするのは辛い行為だ。他の人々と行動を共にしたいと思うし、銃を撃ち棍棒こんぼうを振るうこと(あるいは泣くこと)は社会的な強い要求だ。だが、平和を愛する国際主義者の「傭兵」としては、占領地で軍務につくつもりはない。ほかにも方法がある。それは絶対に確かだ。政治的な代案がすべてそうであるように、この方法にも危険と不確実性と相互不信がともなうだろう。だが、新たな戦争によって絶対的な安全保障がもたらされる「来世」ではともかく、今は代案を採択し、二つの国に二つの民族を住ませよう。そうすればイスラエルにもパレスチナにも平和が訪れるだろう。

「兵役拒否者」の代わりにホロコースト神話を補充してはならない。この問題をめぐってはいやというほどごまかしが行われてきたから、自分もまたアウシュビッツとは無関係でないと口にするのは少々気がひける。私の両親はナチスの強制収容所で二年間を過ごした。私は生まれたときから収容所の記憶にさらされてきた。アウシュビッツという言葉によってすべてをとりつくり、正当化し、説明し、隠蔽してはならない。こういうことをすると矛先が自分に返ってくる。それに最悪の事態を経験した人々を不当にあつかうことにもなる。シャミル、シャロン、ネタニヤフ、ラビンや彼らの同類に、ホロコーストという言葉のみだりに使わせてはならない(注:これらの政治家はホロコーストを経験していない)。

これ以上言うべきことがあるだろうか? 私にはイスラエル生まれの息子がいる。彼は私と同じ軍服を着て、同じジレンマに悩んでいる。これは息子の過失ではない。「一インチも土地を譲らない」「パレスチナ人とは交渉しない」という政策を定めて、意図的に何千ものパレスチナ人を逮捕し、痛めつけ、障害を負わせ、殺してきた人々の責任だ。少なくとも私は、自分のものではない場所に向いて彼らのゲームに参加するつもりはない。それに、この軍服を着たままでゲームをするつもりもない。

2004年6月28日記